

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 近代国語教育史における古田教授の歩み

著者	石井 庄司
雑誌名	日本文学誌要
巻	14
ページ	2-12
発行年	1966-03-21
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019140">http://hdl.handle.net/10114/00019140</a>

# 近代国語教育史における古田教授の歩み

石 井 庄 司

## 一、前 程

明治以来百年にわたる近代国語教育の歴史を、どう跡づけるかは、いろいろの方法があるろう。教育の制度のうえから考えることもできようし、とくに、国語教育においては、教科書の歴史からみることも興味があるであろう。また、教育思潮のうえから、あるいは、教育方法のうえから考えることもできる。

読み書きそろばんというスリーRの考えを受けて、明治のはじめには、いわゆる国語教育はかなり熱心に行なわれてきたようである。しかし、欧米の教育思想を移した、すべての教育では、いっばんに、教授法という名称のなかで取り扱われ、国語教育というものが、しっかりとでてきたのは、明治三十三年（一九〇〇年）八月の小学校令の改正によって、はじめて小学校に「国語科」という教科が設けられてからではないかと思われる。それまでは読書科、作文科、習字科といったものが、打って一丸として国語科という一科となつて、ここにはじめて、「国語教授」ということばが起つてきたようである。

明治三十三年十二月二十五日、「小学校に於ける今後の国語教授」と題する、菊半截一〇〇ページ余りの小さい著述が、芦田恵之助の名によって同文館の「教員文庫」の一冊として刊行された。芦田恵之助は、その年の四月からは、国学院の学生であった。後年、芦田の思い出によれば、学資金の助け、今いうところのアルバイトとして、その年八月に出た小学校令の国語科の趣意を文部当局に聞いたり、また、その年の三月まで勤めていた東京高等師範学校付属小学校の佐々木吉三郎な

どに聞いて、編集したものとということで、表紙には「著」とあるが、中には「編」とあるといったものである。しかし、その中味においては、当時の国語国文の問題点とその教授法のことがよくまとめられている。とくに、話し方教授法とか、文法教授法など、その後長く研究課題となったようなことが、要領よくまとめられて、国語科教授法の一冊の書としては、はじめての有力なものではないかと思う。

文部当局の意見ともみられる保科孝一の「国語教授法指針」のたのは、明治三十四年であり、佐々木吉三郎の「国語教授撮要」は明治三十五年である。この頃から、続々として、小学校令の解説書としての国語科教授法が出版されたが、質において、「今後の国語教授」の右に出るものはなかったようである。

世はまさに、ヘルバルト流の五段式教授法の全盛時代であった。芦田恵之助は、すでに、明治三十二年に、樋口勘次郎の「統合主義新教授法」の洗礼を受けて、児童の自発的活動の尊重すべきを知っていたので、明治三十七年の秋、再び、東京高師付属小学校に勤務して以来、もっぱら児童と共に学習にはげみ、小学校の一年生に綴り方を書かせ、しかも、それは、児童の意にまかせて書かせるというものであった。

かくて、大正二年（一九一三）五月、自己の体験をそのまま書き綴った「綴り方教授」を刊行して、自己の主張を述べた。それに対して、西の広島高等師範学校付属小学校の友納友次郎は、課題主義を唱えて批判し、ここに、めずらしく全国的ひろがりを以て、しのぎをけずった。波多野完治さんの批評によると、これは、わが国教育界はじまって以来の大論争で、ほとんど全国の小学校の先生をはじめ、教育界が、随意選題か、課題主義かの二つにわかれたといわれている。この情況は今日にあつては、ちよつと想像することも困難なありさまであったようである。

## 二、芦田恵之助とのつながり

以上のような情況のところへ古田拡が登場する。ご本人の言によると、その頃、古田さんの勤めていた学校の校長だったか、教頭だったかに、大の課題主義の仁がいた。しかし、その主張するところがしっくりしない。古田さんは、それらとは別の考え方で進んできた。ところがあるとき、友人から「綴り方教授」を借りて読んだ。大正二年にでた芦田恵之助の著述である。古田さんは、松山へ出かける車中で、「綴り方教授」を読んでみたが、実に一々もつともで、つい感心して、人から借りた本であることを忘れて、書き込みをして、すっかりよごしてしまった。そこで、松山の本屋で、新本の「綴り方教

授」を買い求めて、それを友人に返し、さきに借りたものを自分のものとして読んだ。これが芦田恵之助先生とのつながりのもとになったものということであるが、同時にこれは、国語教育者古田拡の出発点でもあるようである。

ただそこにいたるまでの古田拡の全貌については、不幸よく知らないのであるが、少しく伺ったところでは、哲学研究者、あるいは倫理学者であつたらしい。そのもう一つ前には、当時文学者の登龍門とも称せられた、「文章世界」の投書家であつたということである。それは、詩歌散文各部門に常に優秀な成績を収め、今も女流作家としてその名の高い吉屋信子女史とは、絶えず優位を争つたということである。明治三十年代の「ホトトギス」派の写生文の流れの一つにもなるようである。雑誌「ホトトギス」の発祥地が愛媛松山であることからもうなづけるところであろう。しかし、今は、その古いことはしばらく措く。

芦田恵之助の門にはいったのは、昭和三年（一九二八）十二月二十五日ということである。（「復習」上、自序）芦田の門にはいつて、古田拡は、もう高等教員検定などというものとは、サラリと縁を切つて、もっぱら教壇に出精した。

雑誌「同志同行」を見れば、よくわかるのではないかと思うが、それができない。今、わたしの手もとにある古田さんの名が出てくる古いものでは、昭和七年（一九三二）七月刊行の同志同行双書第一編「垣内先生の御指導を仰ぐ記」に、「垣内先生の講演大要」（第一日）がある。これは、昭和七年二月二十九日と三月一日との二日間、渋谷区千駄谷小学校で、芦田恵之助の教壇を垣内松三が見て、批評するという、はじめての事であつた。

芦田先生の「此の度の事」という文章のなかに、こんなことがある

「十月二十三日愛媛県の川之江についた。それは宇摩高等女学校の二十周年の記念式に列せんがためであつた。その夜同志古田拡君の宅にとめてもらつた。君と相知つたのは、昭和三年の冬からである。ずばぬけて頭のよい人で、同時に教壇の熱愛者である。その後は、年に数回あふが、いつも教へられ、清められて帰る。今回は殊に形象のことをきかうといふ野心が私にある。君の顔を見るや、垣内先生の御指導を仰ぐことを語ると、自分のことのやうに喜んでくれた。そこで私の一つの願、形象の話をきいて、壇に立つ準備と安心を得たいことを話した。……」（二一ページ）

というわけで、「さて、形象とは」と滔々数千言、「私は、今までに、これほど形象のよくわかつたと思つたことはなかつた。……」ということであつた。

古田さんが、いかに、芦田恵之助から信頼されていたか、また、それに値するだけの研究を平素において積み重ねていた

か、そういう消息もわかるのである。

ここで古田さんからきいたエピソードを紹介しよう。垣内松三先生がはじめて愛媛へ行かれたのは、大正の終わり頃であったとか。そのとき、垣内先生の講演は、ずっと、オクデンとリチャーズの共著になる「意味の意味」(一九二三年、ロンドン)であった。そこでさっそく丸善の松山支店に、この「意味の意味」の注文をだした人が三人あった。それは林伝次、古田拓、もう一人某であったという。

芦田先生の質問に答えて、「形象」の意義を数千言に滔々と論じ尽くすためには、平素の研究が必要であったわけである。

なお、千駄谷小学校の教壇において、垣内先生が大いにほめられたのは、「大将の父は」「大将の父は」と三度まで続いて、次に「大将の母も」とあり、「両親と共に……」の「共に」に芦田先生が留意されたところにあったのであるが、このへんのことも、古田さんあたりからの示唆があったようである。

さて、第一日の「講演大要」であるが、その前文によると、編集の芦田先生をして、だいぶハラハラさせたようであるが、古田さんが病中にあつてまとめ、当時としてはまだ珍しかった航空速達便で送って来られた模様である。

講演は、「形象と理會」で、例によってなかなかむずかしいものであつたらしいが、古田流によくまとめられている。文の多様性と統一性、その叙述的機構、表現的機構、象徴的機構と層ということの考え方などが現われてきている。

翌八年夏の田辺講演において、いっそう詳しく解かれた「形象の層序」のことなどが出て来たわけであるが、古田さんの筆は、それでもしっかりと書きとめている。田辺市の集会でも、古田さんは、いろいろとだいたいな役割を果たしているようである。余興としては、今もよくやられる、木挽歌なども出たようである。かくして、芦田先生のもとにあつて、沖垣寛、加茂学などと並んで、錚々たるメンバーということをおぼせる。

### 三、「門前屋」

雑誌「同志同行」の第三巻第一号に「門前屋」という文章があり、それが「小学国語読本と教壇」巻三(昭和九年)のはじめに転載されている。それによると、芦田先生は、いわゆる「サクラ読本」の指導書、すなわち「小学国語読本と教壇」を書くために、まず、愛媛県川之江の古田さんの家を訪ね、その家族および付近の現場の先生がたと読本研究をされたが、

その模様をしるしたものである。

はじめに、「門前屋」というがべつに宿屋ではない、しかしじぶんは今とまっている由をいい、「この程宿帳の表書をせよといふから、真中に一宿一飯と筆太に書いて……」とある。そして、その主人、すなわち古田拡さんのことを、次のようにしるされている。

「主人は当年三十九歳、いさゝかかはり者で、宿屋飯盛の流れを汲む人らしい。客を好む点では、柳里恭も三舍をさけるかと思ふ。気の合つた客と語り出すと、夜を徹しても飽かぬ。柳里恭は客のために、家老の職の俸禄を棒にふつて、年中素寒貧で暮したといふが、門前屋の主人は、命までもふりかねまじき意気込、たゞくおそれいつてしまふ」(一一二ページ)

柳里恭とは、「雲萍雑誌」の著者、柳沢湛園のことで、大和郡山の藩士。文学・武術をはじめ人の師となるに足る芸が十六もあったという。また客を好み、絶えず多くの食客を抱えていたという。宿屋飯盛は、石川雅望の狂歌の戯号。実際、江戸六本木で宿屋を営んでいたのであるが、国学者としてもりっぱな業績のある人。以上兩人との比較は、まことにふさわしいものである。

なお、芦田先生は、次のようにしるしておられる。

「私は、この書の巻一を書く時にも、門前屋を訪うて教をうけた。さうして相州湯河原に籠つて書いた。巻二を書く時には、まづ兵庫加古川に於て、師垣内先生の巻二に関する御講演を聴き、たゞちに川之江に走つて、門前屋の教をうけた。そして駿河台に隠れて書いた。巻三は門前屋に滞在して、各教材の取扱を書いて来た。」(三ページ)

これから以後、「小学国語読本と教壇」巻六まで、二カ年間こういう情態が続けられたようである。門前屋の主人の発案で、板書機構をはっきりと書きだしたり、いろいろと形もかわってきた。なかでも、教材研究の場合、古田さんの発言が実に多いものになっている。

その一例として、巻三の二十二、「長い道」の「どこまで行つても、／長い道。／夕日が赤い、／森の上。」の中のさしえについて、古田さんは、「この子供は行きよるのか、帰りよるのか」ときいたとある。(一七〇ページ)——本文に「この子供は行きよるのか」と「が」が濁点になっているのは誤植で、「帰りよるのか」と同じく疑問の「か」である。なお「行きよる」「帰りよる」は、共に関西方言で進行形を示すものである。すなわち、「行きつつあるか」「帰りつつあるか」といったものに近い。

さてこの解釈について、芦田先生は「帰って行くのだと思ふ、向かふに家が見えるぢやないか」という。するとある女の先生は、「私は行きよるのだと思ひます」といい、古田さんも「落日にむかつて進んでゐる子が、やがてまはれ右をして帰るのだ」といった。その原因は、「もうかへらうよ／日がくれる」の「もう」にあることが証拠とされている。

このあたりの一ページは、門前屋の読本研究のおもしろいところで、古田さんが芦田先生の教えの中に「文法教授」のあることを強調されるゆえんかと思われる。（「回想の芦田恵之助」のうちの、「芦田恵之助の文法教授」参照）

門前屋の読本研究において、古田さんのもう一つの功績というべきものは、芦田教式の第六の「意義の取扱」（巻二）、「意義」（巻二）、「わけをしらべる」（巻三）、「わけ」（巻四、五）とあったものが、巻六にいたって「とく」とかえられたことである。「これは同志古田君の教によるもので、従来用ひた『わけ』といふのと内容にかはりはないが、形がととのふ。古田君はいく、「とく」に漢字をあてるとすると、三様ある。「解」「融」「説」。浅い読みの者が取扱ふのは「解」を出でず、よく読んだ者が取扱へば「融」に至る。さらに信念を伝えるやうな場合には「説」でなければびつたり来ぬと。いかにも心のあてとしても、忘れてはならないと思つて、「意義」から「わけ」にかへたのを今度また「とく」に改めたのである」（巻六、三五ページ）

「恵雨読方教壇」（昭和十二年）においても、第六の「とく」の存することはいうまでもないが、第二の「話しあひ」にも「又は説く」が加えられたのも、古田さんの意向を尊重されたからであつた。こうして、七変化の教式を書いて来ると、「読む、話しあひ（又は説く）、読む、書く、読む、とく、読む」

となつて、「とく」だけがかな書きである。これが、昭和十三年五月二十日発行の「教式と教壇」によると全部かな書きで、「よむ、とく、よむ、かく、よむ、とく、よむ」となつてゐる。「よむ」のかな書きは、すでに昭和十年十一月一日発行の「小学国語読本と教壇」巻六において実行しておられるところであるが、全部のかな書きの実現に至つた、一つの動機に「とく」があつたのではなからうか。そのような点からも、古田さんの意見によつて、第六段の「意義」「わけ」が「とく」になつたということには、ひじょうに大きい意義を認めざるをえないのである。芦田教式の完成に培つた古田さんの努力は、この「とく」の一項によつて象徴されているわけである。

もう一つは「復習」についてである。芦田先生の教壇には、巻一から「復習」が入れてある。これについて、とくにくわしく説明したのは、巻五（昭和十年四月二十日）である。このなかで「この復習法は、二三年前から古田君がしきりと研

究をすゝめている所で、今は略大成したかと思ふ。」(一六ページ)と書かれ、「古田君の復習法は我が初等教育に頗る珍とすべきものであると思ふ」(一六ページ)、「漢字の練習について、本当に特に力を用ひたのは、全く古田君の力によるものである」(一七ページ)とも書かれている。かくて、古田さんの復習法もいよいよ世にでることになった。

昭和十二年四月二十日発行の「小学国語読本と教壇」巻九のはじめに「同志古田君が『復習』と題する書を著はして、生の上に復習の意義を論定した。近頃痛快な立言である。全く地から生えた教育眼で、教育界に新着眼の一点を明示した。要約すれば、一切のことは復習をまつて、はじめて真の理会に到達するといふのである。私は古田君の教をうけてはじめて読方教育の領域に重要な一点の忘れられてゐたことをさとつた。読方科の復習に関する部面は、全く未開拓の新天地であることを知つた。……」(三ページ)

#### 四、「復習」

「復習」は、昭和十二年(一九三七)二月十日同志同行社発行、四六判六五七ページに及ぶ大冊である。これが上巻で、あと下巻がすぐ出るはずであつたが、いまだに刊行を見ていない。

芦田先生の「序」があり、「此の書は真実の書である」とある。また「赤裸々の書である。地についた書である。真情流露の書である。至誠の書である」ともある。

第一編は「生の上に」とある。はじめは「緒論」であつたのが、百枚を越す長いものになり、「一種の人生観的なものがある」と著者もいわれるように、名が変わつたばかりでなく、著者の人生観、世界観、教育観、国語観とあらゆるものを示すことになり、けっきょく「生きている人間古田」を如実に出したことになるのではないかと思われる。

「復習」には、ルビが付けてあつて「おさらへ」とある。これは、古田さんの「亡き母のこゑ」であるという。また「亡き父のこゑ」であり、「亡き二名先生のこゑ」でもあるという。蓮如上人の御文章には「信心ノミゾヲサテテ弥陀ノ法水ヲナガセ」とある。その「浚へる」であり、これは又「更」の活用形で、四段にも、下二段にも、下一段にもはたらく、といったことが書いてあつて、次つぎと昔の教室のことがあつたり、いろいろの人の話がある。

そういうところへ、「転」という説がでて来る。「文は言・事・意の三要素から成る。しかし、その一辺一辺の研究は要するに素材研究にすぎない。それを、意がいかに転じて、(理としてのではなく、作用としてのことわりによつて)文とす



るか、その転が創造性個性である」(四五ページ)という。

復習の復はかへるであり、おさらへの新の究竟地というものを究めようとする。

第二編は「読方の上に」とある。その「緒言」というものが一一八ページから一九四ページまでつづく。「復習」の根拠は、まずむかしの教材であった塙保巳一のなかの文にある。

「さてく目あきといふものは……」という「さてく」に、古田さんは「おや」と思ったという。この「さてく」は、巻五、十七課の「虹」に「さてく虹は美しい」とある。また、巻六、第十五の「萬じゆ姫」に「さてく此のたびの舞は日本一の出来」とある。巻七、第十七の「安倍川の義夫」では「さてく、二人ともまことに心がけのよい者。近頃かんしん致した。」とある。同じく第二十三の「加藤清正」の中に「さてく早く参つた」ともある。この四例は字義通りの感動である。しかし、保巳一の「さてく」は、この四例とはちがう。こういうちがいを発見して、「私はうれしくて、うれしくてたまらなかつた(一四六ページ)と著者はいう。

「復習は単なる繰返しではなくて、繰返すたびに意義の深まつて行くところ、理会の新しく進み展けて行くところ、そこが値打でせうね。読んで読んで読み抜いて自分の解釈の進境を自得する処が尊いですね。」(一七〇—一七二ページ)といった同志のことばなどいろいろと引用されている。

いよいよ本論ともいふべき「骨・肉・髓」の「骨」にはいり、以下四百五十六ページ、実に本書の三分の二を「骨」にあたられている。多くは、自他にかかる教室の事象について具体的に説かれてあって、もはや、単なる「復習」だけでなく、一ばんの国語教育論といってもよい。

果たせるかな、本書とほとんど同じく、昭和十二年二月十日発行の岩波講座「国語教育」の第五回配本に、古田さん執筆の「読方教授体系」がある。これも一〇八ページというこの講座のなかでは大冊である。

#### 序 ヒカウキ

##### 一 「と」なき「と」

##### 二 つくりかためなす力

##### 三 言・事・意——「むすび」と「ことわり」

##### 四 よむよぶ

結び

余論 その一 復習

骨

肉

髓

つらぬきむすぶもの

その二他学科と共の教科書

「余論」とあるが、この「復習」で前の著述とくに未刊の「復習下巻」の構造も理解できるわけである。

「骨」は、「これは一課の漢字全部を書くのである。それは一つの抽象作用で、文の骨格が明瞭につかめる」（八七ページ）という。「肉」は、「前記の漢字を辿って暗誦又は暗写するのである。」（九〇ページ）とある。「骨」は、文の主成文をなす主語と述語とは、全部といってよい程、漢字である。それだけ見れば図式的に文の骨格がわかる。文の理会の「たしかさ」は得られる。そこでこんどは「ゆたかさ」に進む。それが暗誦であるという。こんな説明がある。次に「ふかさ」をねらう。それが「髓」であるという。それをつらぬきむすぶものでしめくりをする。

この年の九月十日、第十二回配本の岩波講座「国語教育」で、古田さんは「教室論」六八ページを発表しておられる。「国語教室の読声——またはその空気」にはじまって、「国語教室の機構」「国語教室の柱」そして「国語教室の所在」で結となる。さらに芦田先生の教壇に引用されていた「とく」の三態がややくわしく述べられている。（四六一—四九ページ）なお、昭和十三年（一九三八）五月五日垣内松三先生の還暦を記念するために恵雨会によって刊行された「国語教育道」に「極深研幾」というのを書いておられる。芦田先生の教壇「釈迦」（尋常小学国語読本巻十二第十九課）の筆記と沖垣寛の「真実の教育を求めて」と、この三人の研究論文集である。

## 五、戦後の国語科教育

はじめて古田さんにお会いしたのは、昭和十二年五月のはじめであった。わたしは、新しく改正された教授要目の説明会に、松江、岡山を経て、四国一円の会場である松山に赴いたのであった。会場は、旧松山高등학교であったので、旧知の武智雅一教授に迎えられ、一夕歓談した。そのとき、当時の愛媛師範学校付属小学校の主事としての古田さんにお会いしたの

であった。なお、女子師範付小主事の大野静氏などといっしょであった。思えば、古田さんは、以上のようないくつかの文章をものして、意気まことに盛んなときであった。

越えて、数年後、篠原利逸君の勤めていた神谷小学校で、古田さんの教壇を見せてもらった。そして、しばらくは会えなかったが、昭和二十五年になって、刀江書院の国語教育講座の編集者として、たびたびお会いするようになった。

そのうちに、新しくできた大学の講座として、人文科学教育、あるいは、国語科教育という講座ができ、その講座担当者の集りをしたいと考えて、二、三の同志と集って準備委員会のようなものを作った。その会合でいつもたいせつな潤滑油的の役割を果たして下さったのは、古田さんであった。垣内松三、保科孝一、藤村作、西尾実の諸先生を顧問として、全国大学国語教育学会の発会式を挙げたのは昭和二十五年（一九四五）九月二十三日のことであった。そして、わたしども数名のものは、常任理事として、会務にたずさわることとなり、毎月一回の常任理事会には、古田さんがいつも豊富な話題を提供して下さった。

戦後における古田さん、ここでは、古田教授の活動はすばらしいものであった。

さきほど来、かなりくわしく、芦田恵之助先生との関係を述べてきたが、戦争中に、古田さんは、北京において、山口喜一郎先生の知過を得られた。とくに、山口先生の主張される話し聞く教育について、古田さんにはまた、独自のものがあつた。芦田先生には、昭和三年以来の長い時期であつたが、それにも劣らず、山口先生からたいせつなものをうけてきておられる。その間、西尾実先生から得られたものも少くない。それらを総合して、古田さんらしいものが出てきたのは、昭和二十七年（一九四七）に刊行された「聞くことの教育」ではないかと思われる。もっとも、これは、西尾実先生ご自身の考案になる「これからの国語教育のために」の一冊としてくださったものであった。

聞くこと話すことの教育、とくに、聞くことの教育については、戦後、西尾実先生の指導によって進歩し、戦後の日本の国語教育の一特色となったものであるが、それを、古田さんの長い経験から深く掘り下げて、さらに発展させられたものである。しかし、古田さん自身は、いつも、先師芦田先生の仕事からそれを引きだし、また、山口喜一郎先生の「外国語としての我が国語教授法」（昭和八年）に説かれていることを、身を以て実践して来られたところを展開されたものである。

芦田先生については、作文に関して随意選題の創始者、読み方では七変化の教式の完成者という点で語られる面が多く、また、それで天下を動かしたのであるが、そのほかにも、聞くこと話すことについての基本的な立言のあったこと、また、

文法教育について、今なお学ぶべき開拓をしていた点（「回想の芦田恵之助」）を述べ、ごじぶんも、文法教授について多への研究と発明をしておられる。

それはまた、直ちに、新しい文学教育につながるところもあり、時枝博士の文章研究について批判の仕事を怠らないのも、古田さんにとっての大きな仕事である。ことは、早く全国大学国語教育学会の第二回を四国地区の愛媛大学で開催されたとき、時枝博士の冒頭主題説について、古田さんは熱心な反論者であり、わたしの記憶しているところでも、幾回か学会の席上熱心に論じ合われ、いまなお、両者の間に決着がついていないしだいである。

大学における国語科教育はどう行なったらよいか。国語教育学はどういうものであるかについては、早く、西尾実先生の「国語教育学の構想」（昭和二十六年）とか「国語教育学序説」（昭和三十二年）で明らかにして下さっている。が、未解決の問題も多く、そこを独自の立場から究めておられるのが古田教授である。大学の教授としての古田さんの業績で他人の為し得ないところは、やはり古田さんの青少年時代における創作家志望の時代の体験が大きく働いているのではないかと思う。

わたしは幸なことに、この十数年、たびたび古田さんの教壇を見せていただき、また、いっしょに学会の国語教育講座などの編集に関係している。そして、古田さんの創意にみちた意見が泉のように湧いて来ることに常に驚かされている。教材研究といい、授業研究といい、古田さんはいろいろのことを実践を通してやって来られた。とくに、若い先生の教壇の批評などをした後は、自身の実践を通して、それを実証するという熱心さであった。国語教育学を地で実践しうる人は、古田教授を措いて、他に余りないのではないかと思う。

それについても思いだされるのは、またしても、芦田先生のことばであるが、昭和十年十一月一日発行の「小学国語読本と教壇」巻六のはじめに

「門前屋の主人は極めて頭のよい人だが、からだはあまりよくない。體質を今にして改造しなかつたら、長命はおぼつかないと思ふ。柳に雪折なしなどいふことは、定理としては極めて薄弱なものだ。私は常に思つてゐる。この主人を今後一年長く生かせば一年我が国語教育が救はれると。もつと端的にいへば、真の国語教育は、この人によつて今照らされかけてゐるのだ。……」（五ページ）

とある。それから、まさに三十年は過ぎた。まことに、芦田先生のことばのように、古田さんが一年元氣であることは、それだけ日本の国語教育は伸びる。この節、「問答」その他、実にいい著述を次つぎと完成される。ぜひ、「復習」の下巻を完成していただきたい。それは、そのまま、日本の独自の国語教育体系の樹立ということになるのであるから。